

## 乳幼児の育ちのプロセスに関する 縦断研究

2019年2月  
株式会社ベネッセコーポレーション  
ベネッセ教育総合研究所  
次世代育成研究室長

高岡 純子  
1

## 本日のアジェンダ

- 1) ベネッセ・教育総合研究所ご紹介
- 2) 育ちのプロセスに関する縦断研究の取り組み
  - ①「学びに向かう力」とは？
  - ②日本の「学びに向かう力」研究と幼児の発達
  - ③親の関わりとの関連
  - ④幼児教育・保育との関連
- 3) 国を超えた研究ネットワークの取り組み

2

## ベネッセ教育総合研究所



©ベネッセ教育総合研究所, 2013

6

## ■教育調査



7

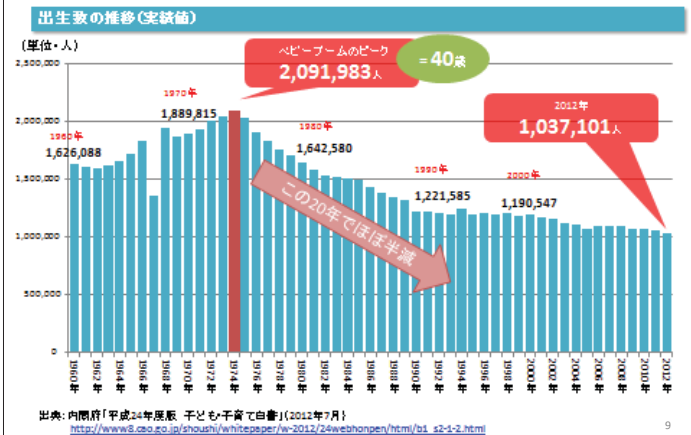
## 本日のアジェンダ

- 1) ベネッセ・ベネッセ教育総合研究所ご紹介
- 2) 育ちのプロセスに関する縦断研究の取り組み
  - ①「学びに向かう力」とは？
  - ②日本の「学びに向かう力」研究と幼児の発達
  - ③親の関わりとの関連
  - ④幼児教育・保育との関連
- 3) 国を超えた研究ネットワークの取り組み

8

## 子どもの数の減少

### 乳幼児の親は、少子化世代



9

## 日本の乳幼児家族の変化

1. 親の年齢層が広がる  
0歳6か月～1歳5か月児を持つ父親 19歳～59歳  
0歳6か月～1歳5か月児を持つ母親 18歳～47歳
2. 自分の子どもが生まれるまでに赤ちゃんに接したことのある人は約半数(0～2歳児を持つ父51.1%、母45.1%)
3. 幼児の生活は「家庭」と「園」が中心  
①親子のかかわりが密になり、地域で遊ぶ機会は減少  
②園の役割が拡大  
③親も近所で子どもを通じた付き合いが減少
4. 20年前より教育費は大幅に減少
5. 母親の子育ての価値観が変化

幼児が多様な人と関わりながら、豊かな社会性を身につけたり、他者と協働しながら価値を創造する機会をどうつくるか

## 1. 学びに向かう力とは？

「学びに向かう力」=目標の達成、情動の抑制、他者との協同  
(OECDでは、「社会情動的スキル」)



(OECD,2015)

# 1. 学びに向かう力とは？

特徴①スキルはスキルを生む

## 生涯にわたるスキルの発達

★乳幼児期の影響が大きい



社会情動的スキルは、過去の学習を基に時間とともに徐々に発達する。スキル発達は遺伝子や環境だけでなく、家庭、学校、地域社会からのインプットによっても影響を受ける。親は、この発達に影響を与える多くの環境的要因を形成する。文化、政策、制度がスキル形成や学習環境に与える影響もある。

(OECD,2015)

12

# 1. 学びに向かう力とは？

特徴② 認知的スキルと「学びに向かう力」は相互に影響しあって発達する

## 認知的スキルと社会情動的スキルの動的相互作用



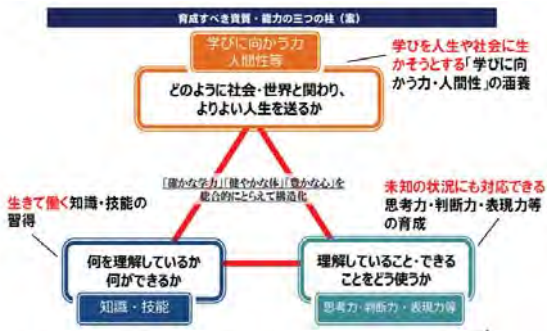
スキルはスキルを生む。個人の持つスキル水準が高いほど、スキルの獲得が大きい。社会情動的スキルが認知的スキルの発達にも役立つ。スキルの高い子どもは認識を向上させるような手段を選択したり成長のための更なる機会を求めたりする可能性が高い。

(OECD,2015)

13

## 2. 日本の「学びに向かう力」研究と幼児の発達

2018年4月～施行の幼稚園教育要領、保育所保育指針等で示されている育成すべき資質・能力の3つの柱



出典: 幼稚園教育要領(2018) 保育所保育指針(2018) 小学校学習指導要領(2018) 高等学校学習指導要領(2018) 大学入学共通テスト(2018) 職業教育(2018) 生涯学習(2018) 幼児教育(2018) 職業教育(2018) 生涯学習(2018) 幼児教育(2018) 職業教育(2018) 生涯学習(2018)

14

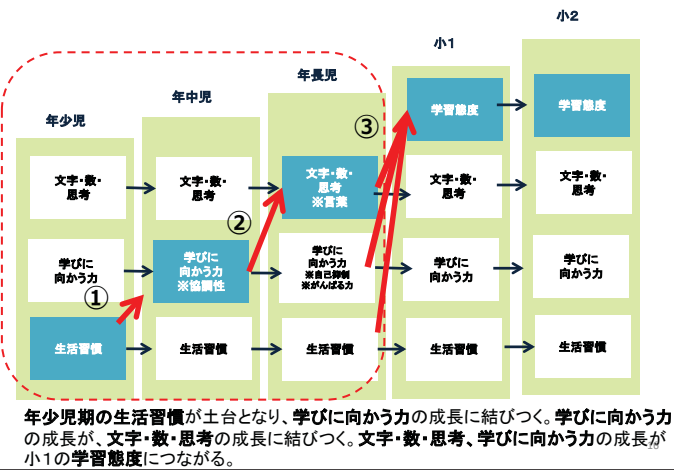
## 2. 日本の「学びに向かう力」研究と幼児の発達

ベネッセの研究では、「学びに向かう力」を5つのカテゴリーに分類 幼児期の学びの3つの軸＝小学校以降の学習や生活に適應するために求められる幼児期の学び

生活習慣	学びに向かう力	好奇心	わからないことについて、「なぜ」「どうして」など、まわりに質問ができる など5項目
		協調性	遊びなどで友だちと協力することができる など5項目
		がんばる力	物事をあきらめずに挑戦することができる など4項目
		自己統制	自分がやりたいと思っても人の嫌がることはがまんできる など6項目
		自己主張	人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる など5項目
文字・数・思考	学びに向かう力	文字	かな文字を眺める など4項目
		数	「1個、1本...」などの数え方ができる など3項目
		言葉	自分の言葉で順序をたてて、相手にわかるように話せる など4項目
		分類する力	身の回りにあるものの長さや大きさ、高さを直接並べて比べられる など4項目
生活習慣	夜、決まった時間に寝ることができる など7項目		

15

## 年少児期から小2までの発達プロセス



年少児期の生活習慣が土台となり、学びに向かう力の成長に結びつく。学びに向かう力の成長が、文字・数・思考の成長に結びつく。文字・数・思考、学びに向かう力の成長が小1の学習態度につながる。

## 3. 親の関わりとの関連

年長児期の「言葉」「がんばる力」を支えるのは、子どもの「思考を促す関わり」と「意欲を尊重する態度」。



出典: ベネッセ教育総合研究所「幼児期から小学校1年生の家庭教育調査-継続調査」  
http://www.benesse.jp/education/research/detail.php?sr=2884

17

## 3. 親の関わりとの関連

「子どもの意欲を尊重する」「子どもの思考を促す」とは？

### 「子どもの意欲を尊重する」

- ▶ 子どもの気持ちを受け止める
- ▶ 子どもがやりたいことを尊重し、支援する
- ▶ 子どもの意見や要望を優先させる
- ▶ しかるとき、子どもの言い分を聞く

### 「子どもの思考を促す」

- ▶ 子どものよい聞き手になる
- ▶ 子どもの中にある考えや言葉を受け止め、引き出す関わりをする
- ▶ 子どもと同じ目線で興味を持ったり、共感したりする

18

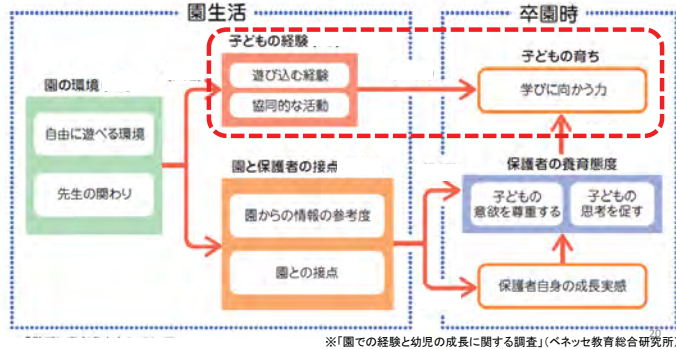
## 幼児期から小学校高学年までの関連

19

## 4. 幼児教育・保育との関連

「学びに向かう力」の育ちに、園での子どもの「遊び込む経験」が関連している

※矢印は、本調査で明らかになった各要素の関連を示す（一部、本レポートで図示を省略しているものも含む）



※「園での経験と幼児の成長に関する調査」(ベネッセ教育総合研究所)

## 4. 幼児教育・保育との関連

園での“遊び込む経験”や“協同的な活動”を支えるのが  
“自由に遊べる環境”や“先生の受容的な関わり”

### 「遊び込む経験」指標

1. 遊びに自分なりの工夫を加える
2. 先生に頼らずに製作する
3. 挑戦的な活動に取り組む
4. 見通しをもって、遊びをやり遂げる
5. 好きなことや得意なことをいかに遊ぶ
6. 自由に好きな遊びをする

### 「協同的な活動」指標

1. 目標に向けて友だちと協力して取り組む
2. 行事の役割(劇の配役やリレーの順番など)を子どもたちが決める
3. 行事(運動会や生活発表会など)で友だちと協力しあう
4. 友だちと関わる中で、友だちのいいところや得意なことを知る

その子らしさ

自由度の高さ

主体性の発揮

協同性

### 「自由に遊べる環境」指標

1. 自由に遊べる時間が十分にある
2. 自由に遊べる遊具や素材が十分にある
3. 自由に遊べる場所が十分にある
4. さまざまな表現活動をする
5. 季節に応じた教材や絵本が使われている

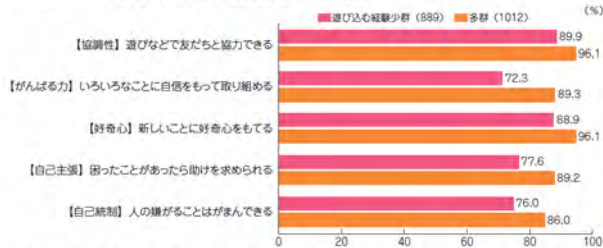
### 「先生の関わり」指標

1. 先生は子どもの「やりたい」気持ちを尊重
2. 先生の言葉かけが温かい
3. 先生同士の連携がとれている
4. 先生がのびのびと保育をしている
5. 先生は保護者の気持ちに寄り添っている

## 4. 幼児教育・保育との関連

園で“遊び込む経験”が多いほど、年長児の「学びに向かう力」は高い

子どもの「学びに向かう力」(遊び込む経験別)



※「学びに向かう力」は、5つの領域(好奇心・協同性・自己主張・自己統制・がんばる力)に關する15の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ選ぶ。※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。※遊び込む経験を示す6項目(95、92、91、91)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「まあよかった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を標準化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

※「園での経験と幼児の成長に関する調査」(ベネッセ教育総合研究所)

## 本日のアジェンダ

- 1) ベネッセ・ベネッセ教育総合研究所ご紹介
- 2) 育ちのプロセスに関する縦断研究の取り組み
  - ①「学びに向かう力」とは?
  - ②日本の「学びに向かう力」研究と幼児の発達
  - ③親の関わりとの関連
  - ④幼児教育・保育との関連
- 3) 国を超えた研究ネットワークの取り組み

23

## Child Research Net 子どもは未来である

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は、学際的な「子ども学」の理念にもとづき、世界の子どもを取り巻く諸問題を解決するために1996年に日本で設立された、「インターネット上」の子ども学研究所である。ベネッセ教育総合研究所の支援のもと運営されている。

### <CRNの特徴>

【学際的な研究】医学、脳科学、保育、教育、発達心理学から社会学にいたるまで、子どもの生物学的な側面と社会的側面から、多岐に渡る研究知見を収集し、発信している。

【研究テーマ】社会情動的スキル、遊び、メディア、発達障害、保育・幼児教育 (ECEC)、産前産後ケア、脳科学、心のケア、権利、いじめなど。

【発信メディア】ウェブサイト(日英中)、公式Facebook(日英)

公式Twitter(日)、公式Weibo(中)に加えて、オフラインの国際会議、シンポジウムなどもある。



小林登(創始者、CRN名譽所長)  
医学博士、東京大学名誉教授、国立小児病院名誉院長。



桐原洋一(CRN所長)  
医学博士、お茶の水女子大学名誉教授、ベネッセ教育総合研究所常任顧問、日本子ども学会理事長。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞、二男一女の父。

24

## アジアを中心とした現在の活動

### CRNウェブサイト

日、英、中(簡体字、繁体字)  
三言語で発信



### CRNアジア子ども学研究ネットワーク

日本、中国大陸、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、フィリピン、シンガポール、台湾、タイをメインの活動地域に据え、アジアの子どもを取り巻く諸問題の解決のため、活動している。



25

国際シンポジウムの様子を写真で紹介したいと思います。

ご清聴ありがとうございました

26

27